

ドライブ

神永学

1

「あれ？ 久保田君だよくぼたね」

声をかけられた久保田久弘ひさひろが顔を上げると、そこには一人の女性の姿があった――。

「えっと……ゆ、有紀子ゆきこ？」

ただどしどしい返答をしてしまったのは、久しぶり過ぎて、彼女のことを分からなかったからではない。

十五年という歳月が経っているのに、当時と変わらない彼女の姿が眩まぶしかったからだ。

「そう。久保田君、元気そうだね」

有紀子が、そう言って柔らかない笑みを浮かべた。

それを見て、久保田の中に当時の記憶が一気に蘇よみがえった。

久保田が、有紀子と交際していたのは、大学二年生から四年生ま

での二年間だった。その間に、本当に色々なことがあった。どれも、楽しい思い出ばかりだと言っても過言ではない。

感情が、当時に引き戻されそうになったが、何とか踏み留まった。昔みたいに、「ひーくん」ではなく、「久保田君」という呼び方をしていることが、二人の間に流れた時間を象徴している。

「そうだね。そっちも……」

危うく「綺麗だ」と言いそうになったのだが、慌ててその言葉を呑み込んだ。

有紀子の左手の薬指に、指輪が嵌まっているのに気付いたからだ。別れを切り出したのは、久保田の方なのだ。それに、長い年月が経っている。彼女が結婚していたからといって、責めたり、落胆したりするのはお門違いだ。

頭では、分かっているが、ざわっと気持ちに波が立つ。

店内に咳払いの音が響いたことで、一気に現実に引き戻される。

今は、コンビニのレジで接客中だった。有紀子の後ろに並んだ客が、早くしろと催促をしてきたのだ。

久保田は、慌てて商品のバーコードを読み込んで行く。本当は、有紀子と言葉を交わしたかったのだが、視線を合わせることもすらできなくなってしまった。

三十五にもなって、フリーター同然である自分のことが、急に恥

ずかしくなった。

有紀子は、高級そうな服に身を包んでいる。持っているバッグも、ハイブランドのものであることが分かる。

会計に差し出されたカードはブラックだった。玉の輿たまこしに乗ったのだろう。

「仕事中にごめんね。つい、懐かしくて」

有紀子は、囁ささやくように言うと、そのまま立ち去って行った。

揺れる彼女の髪から漂ただよう香りは、十五年前とは、全く違うものだった。

並んだ客を、黙々と処理した。

一段落着いて、大きく伸びをしたところで、また新たな客がやって来た。

有紀子だった。

彼女は、客が捌さばけるまで、待っていたらしい。

——なぜ？

久保田が、驚いた顔をしていると、有紀子は何も言わずに、折り畳んだ紙をカウンターのの上に置き、小さく笑みを浮かべて、コンビニを出て行った。

手に取り開いてみると、そこには、無料メッセージアプリのIDが記されていた。

彼女が、再び自分と繋がりを持とうとしてくれている。すぐにも、連絡したい。だが、久保田はバイトを終えた後も、連絡することができずにいた。

一人帰宅して、六畳一間のアパートの布団に寝転び、薄汚れた天井を見上げると、自然と有紀子の美しい顔が浮かんだ。

久保田が有紀子と出会ったのは、大学の演劇サークルだった。

元々、演劇に興味があったわけではない。同じゼミの佐藤さとうに誘われて、見学だけのつもりで見に行ったのが始まりだった。

それまで、何かに夢中になったことのない久保田だったが、演劇との出会いは衝撃的しんげきてきで、すぐにのめり込むようになった。

芝居しばいの演目によって、異なる役を演じることができるといのが、飽き性の久保田には、合っていたのかもしれない。

何より、空っぽの自分が、特別な何かになれたような気がした。その演劇サークルの一年後輩として入って来たのが、有紀子だった。透き通った美しさに誰もが魅了みりょうされ、熱あつを上げた。

久保田は、そうした男たちを蹴散けちらし、有紀子の恋人という役を掴み取った。

誰もが羨うらやむ美しい恋人がいて、演劇に情熱を注ぎ、あの頃の久保田は、青春を謳歌おうかしていた。

周囲が就職活動を始めても、久保田は演劇の熱が冷めることはな

かった。

その頃から、有紀子との関係が悪化していった。

彼女は、久保田に就職を勧めてきた。久保田が役者として、生きて行きたいことを伝えると、やんわりとではあるが、それを否定してきた。

役者として大成する人間は、一握りどころか、一掴まみ程度だということとは分かっていた。

ただ、当時の久保田は、自分がその一掴まみなのだと信じて疑わなかった。役者として成り上がっていく姿を想像し、悦えつに入ったりした。

そんな久保田を見かねたのか、有紀子が「ひーくんには、役者は無理だと思う」とはつきりと言った。

その一言が決定打となり、久保田は有紀子に別れを告げた。自分の才能を信じない恋人とは、一緒にいられないと思った。寂しさは感じなかった。

やがて成功者となれば、自分は有名な女優たちと浮名うきなを流すことになる。色々な女性と関係を持つには、彼女の存在は邪魔になるとすら思った。

その選択が、間違いであることは、今の生活を見れば明白だ。残念ながら、久保田は一掴まみにはなれなかった。

最初から才能が無かったのだ。

大学を卒業した後、幾つかの芸能事務所の面接に行ったが、結果は散々だった。何とか、劇団に入ったものの、客入りは悪く、毎回、赤字を抱えることになった。

自然と卑屈ひくつになり、自分の演技力の無さを、演出や脚本のせいだと罵ののり、売しれている劇団を批判ひはんした。

そんなことをしたところで、状況が変わることはなく、次第に劇団での活動時間は減り、バイトがメインになって行った。

三十を過ぎた頃になって、ようやく自分に才能が無かったのだと自覚したが、もう手遅れだった。

二十代の頃は、バイト先の店長から、社員になることを勧められすすめられたが、今ではシフトを減らされる有様だ。

実家からの援助えんじょも打ち切られ、電気代を払うにも困窮こんきゆうしている状態だ。

今のみずぼらしい姿を、有紀子に見せるわけにはいかない。だから、連絡などできない。でも、もう一度でいいから、彼女の顔を見たい。

悶々もんもんとした気持ちを抱えながら、スマートフォンを見つめていた久保田は、妙案を思い付いた。

——そうだ。役作りということにすればいいのだ。

次に出演する作品の役作りのために、友人の経営するコンビニでバイトをさせてもらっていたことにしよう。

あの時の選択を、後悔して腐くさっている自分ではなく、今も尚、夢を追い続けている——そんな自分を演じるのだ。

久保田は、さっきまでとは打って変わって、意気揚々ようようとした気分
で、有紀子にメッセージを送った。

2

「久保田さん。今日は、機嫌がいいですね」

バイトを終えるタイミングで、高校生のバイトの武英たけふさが声をかけ
てきた。

喋り口調は常に気怠けだるげで、感情の起伏きふくが乏とぼしいタイプなのが、
顔だけは男の久保田から見ても、うっとりするほどにかっこいい。

武英目当てで来店している女性客も、かなりの数いるので、集客
に一役買っているのは間違いない。

以前に、芸能事務所のスカウトが、店舗に押しかけて来たことが
あったが、「興味ないんで」とけんもほろろに追い返してしまった
という逸話いっわを持っているほどだ。

久保田も、武英くらいの容姿があれば、役者として大成したかも

しれない——と思うが、無いものねだりをしても仕方ない。

「そんなに、機嫌良さそうに見えるか？」

「ええ」

武英が無表情に応じる。

抑えていたつもりだったが、自分より一回りは年下の武英に見透かされてしまうとは、情けない限りだ。

武英のような、超が付くくらいイケメンなら、元カノとのデート如きで、浮かれたりほしくないに違いない。

「まあ、ちよつとね」

久保田は、気恥ずかしさも手伝い、適当に返事をする、制服を脱いでバックヤードから店舗を出た。

京王線けいおうで新宿に出た後、西口にある高級ホテルに向かう。

エントランスを潜ったところで、一旦、トイレに入って、鏡で何度も髪型や服装をチェックする。

再会した日から、有紀子とのメッセージのやり取りをするようになった。

言葉を重ねるごとに、記憶は楽しかった頃に引き戻され、彼女に対する想いが募っていった。

有紀子も、同じ気持ちだったはずだ。

だから、食事でもないか——という誘いに乗ってきた。

この前のような不意打ちではなく、こうやって、改めて有紀子と会えることが楽しみで仕方ないが、不安が無いわけではない。

会う場所として、有紀子はホテルのラウンジを指定してきた。

ネットで値段を見て驚いた。ソフトドリンクだけで、千円を超える。二人分の食事代を払うとなると、久保田の一週間分のバイト代が軽く飛ぶ。

場所を変えることを提案しようと思ったが、それをしてしまうと、生活に困窮していることがバレてしまう。それでは、あまりに格好がつかない。

先のことを考えるのを止め、口座に入っているお金を全部おろした。

問題は他にもある。服装だ。流石に、さすが格安量販店で買い揃えた服というわけにはいかない。そこで、舞台衣装を手がけている友人に頼み込み、スーツを一式貸してもらった。

こうして鏡で改めて見ると、少しだぼついていて、袖の部分も長すぎるような気もするが、まあ、贅沢は言っていられない。

「よし。大丈夫だ」

久保田は、鏡の中の自分に気合いを入れると、待ち合わせ場所であるラウンジに向かった。

入り口で、ウェイターに名前を伝えると、すぐに席に案内された。

有紀子はまだ来ていない。

深いソファ―に腰掛け、不自然なくらい高い天井を見上げると、自然とため息が漏れた。

夢を追いかけて、ずっと金のない生活を送っていたので、これまで高級ホテルのラウンジに足を運ぶような機会は、一度もなかった。

当たり前のように、こういう場所を指定してくる有紀子とは、住む世界が違うのかもしれない。

そう思うと、どんどん不安が頭をもたげてくる。

「お待ちせ」

いっそ、帰ってしまおうかと思ったところで、有紀子が久保田の前立った。

「いや。今来たところだよ」

久保田は、慌てて立ち上がると、笑顔を作ってみせた。

ただ、自分でも分かるほどに、ぎこちないものになってしまった。

「久保田君は、いつも早く来ていたわね」

「そうだっけ」

惚けた調子で答えながらも、心がざらついた。

メッセ―ジのやり取りで、昔に戻れたような気がしていたが、やはり呼び名は久保田君のまま。

浮き足立っていたのは、自分だけだったのだと思ひ知らされる。

そもそも、有紀子は既婚者きこんしやなのだ。

そんな不安も、向き合って会話を始めると、みるみる消えていった。

有紀子は、久保田の話によく笑ってくれた。そういえば、交際していた頃も、そうだった。彼女は、ころころとよく笑った。それだけではなく、久保田の語る役者論を、真剣な眼差しで聞いてもくれた。

今になって思えば、当時、久保田が役者として大成するという自信を持ったのは、有紀子が隣にいたからなのかもしれない。

彼女がいたから、自分を肯定できたのだ。

有紀子と別れたことが、久保田の人生最大の過ちあやまだった。

食事を終え、デザートが運ばれて来たところで、有紀子の顔からすっと笑顔が消えた。

「どうかした？」

久保田が訊ねると、有紀子は目を細めた。

「何でもない。ただ……何で、あの時、ひーくんを応援できなかったのかなって思ってた……」

——ああ。ようやく、昔みたいに呼んでくれた。

そのことが、久保田の心に響いた。

「仕方ないよ。あの時は、おれも意固地いこじになっていたんだ」

責めていない。そう主張するために、微笑ほほえんでみせた。

「違うわ。私ね、今でも後悔しているの」

「後悔？」

「うん。あの時は、将来のこととか不安ばかりで、自分の気持ちに素直になれなかった。大変だったとしても、ひーくんと一緒にいた方が、ずっと楽しかったのに……って」

「家庭は、上手くいっていないの？」

久保田が訊ねると、有紀子の顔が強張った。

訊ねるべきではなかったと反省したが、もう手遅れだ。

沈黙が重かった。

だが、しばらくして、有紀子は口を開いた。

「ちゃんと言ってなかったけど、私、佐藤君と結婚したの——」

「佐藤って、あの佐藤？」

久保田が聞き返すと、有紀子がコクリと頷いた。

驚きとともに、そうだったのか——と納得する部分もあった。

久保田が、有紀子と交際している時から、佐藤ひが彼女に惹かれて
いることは知っていた。だが、気にしたことは無かった。

佐藤は、勉強は並外れてできるが、それ意外のことは、てんで駄目だった。容姿も何処どこか冴さえなかつたし、女性に対して免疫めんえきが無く、恋愛に奥手だった。

久保田は、自分とは真逆のタイプの佐藤を何処か下に見ているところがあつた。

だが、学生という期間を終え、安定を求めた有紀子が、結婚相手として佐藤を選んだのは理に適^{かな}っている。

それから有紀子は、佐藤との結婚生活における不満を、ポツポツと話し始めた。

佐藤は、大手企業を退職し、起業したらしい。しかも、業績は上り調子で、贅沢な暮らしができているのだという。

有紀子が求めていた、安定した生活を手に入れたはずだ。

しかし、日々、何の刺激もなく、退屈を持って余しているのだという。佐藤との会話はほとんどなく、結婚当初からセックスレスなのだという。

そんな状態だったので、子どももおらず、日に日に女としての自信を失っていったのだそうだ。

話を聞きながら、久保田の中に、激しい嫉妬^{しつと}が湧いてきた。

こんな風に、有紀子を悲しませるなら、自分がずっと側にいれば良かった——いや、そもそも、別れを告げたのは、久保田の方なのだから、そんなことを言う権利はない。それでも……。

「ねえ」

久保田の思考を遮^{かきと}るように、有紀子が声をかけてきた。

「ん？」

「私ね、今日はこのホテルに泊まる予定なんだ」

有紀子が、上目遣いうわめづかに久保田のを見た。

その視線には、甘く淫靡いんぴな熱が込められていた――。

3

「最近、何かあったんですか？」

品出しを終えて、レジカウンターに戻ったところで、武英から声をかけられた。

無表情で、いかにも他人に関心が無さそうなのに、武英は本当に周りをよく見ている。いや、そもそも、久保田は、今の高揚たかうようする気持を隠してはいない。

ホテルのラウンジで有紀子と食事をした後、そのまま彼女の宿泊している部屋で一夜を過すごした。

濃密で、刺激的な夜だった。

あれからも、幾度となく有紀子と逢瀬おうせを重ねている。

彼女と再会したことから、完全に腐っていた芝居への情熱が再燃し、改めてオーディションを受けまくっている。

結果はまだだが、手応えておたのようなものを感じているのも事実だ。

やはり、自分には、有紀子が必要だったのだ——ということを、改めて感じる事ができた。

「別に何でもないよ。それより、武英君はどうなの？」

久保田は、笑みを浮かべつつ話題をすり替える。

「何がです？」

「彼女とかいないの？」

「いないっすね」

こういう話題を出せば、少しは恥ずかしがるかと思ったが、眉一つ動かさない。張り合いが無いにも程がある。最近の子は、みんなこんなのだろうか？

「クラスに、気になる子とかはいないの？」

「いません。ぼく、年上が好きなんで」

年上と言っても、高校生なら一つか二つと言ったところだろう。

「久保田じゃないか」

急に名前を呼ばれ、久保田はハツとする。

武英と話をしていたので気付かなかったが、いつの間にかレジカウンターの前に、一人の男が立っていた。

色白で、面長で、痩せすぎなくらい、痩せた男だった。仕立てのいいスーツからは、金持ち臭が漂っている。

年齢は重ねたが、上品で涼しげな目許は、昔と全然変わっていない

い。

「佐藤——」

久保田が声を上げると、「覚えていてくれたか」と、佐藤が嬉しそうに目を細めた。

「もちろんだよ」

久保田は、笑顔で応じたが、心臓はバクバクと早鐘はやがねを打っていた。佐藤が、このコンビニに来たのは、ただの偶然だろうか？ それとも、有紀子との関係を知ったのか？

分からない。分からないからこそ、次に続く言葉が見つからない。「いや、本当に懐かしいな。何年ぶりかな？ 今も、役者を続けているのか？」

久保田の心情を知ってか知らずか、佐藤は興奮気味に声を上げる。「十五年だよ。一応、今も役者をやっている」

どうしても声が硬くなってしまう。

「あ、ごめん。仕事中だったね。また、後で——」

後ろに客が並んだことに気付いたのか、佐藤は手を振りながら、その場を離れて行った。

完全な不意打ちだ。

あのまま会話を続けていたら、思わず余計なことを喋ってしまっただろう。

いや、むしろ、佐藤は有紀子との関係に気付いている。だから、わざわざ、久保田がいるこのコンビニに来たに違いない。

——どうする？

久保田との関係がバレれば、有紀子は離婚ということになるかもしれない。それだけではなく、慰謝料いしやりようを請求されるような事態に発展することもある。

何れ有紀子いずは、佐藤から奪うつもりでいたが、今すぐに——ということになる、話は違う。

久保田の六畳一間のアパートに、有紀子を住まわせるわけにはいかない。

いや、待て。まだ、バレたと決まったわけではない。有紀子がそうであったように、偶々たまたま、このコンビニに立ち寄っただけということも考えられる。

そうだ。そうに違いない。もし、久保田と有紀子の関係を知っていたら、あんなに平然としていられるはずがない。

でも——。

考えは堂々巡りを続け、何一つ結論を導き出すことができなかった。

「さっきの人、知り合いですか？」

客足が落ち着いたところで、武英が訊ねてきた。

「ああ。大学時代の友人だ」

「へえ。佐藤義昭よしまさと知り合いなんて、凄いですね」

「知ってるのか？」

驚きと共に訊ねると、武英が不思議そうに首を傾げる。

「はい。ペタのCEOの佐藤さんですよ」

「ペタ？」

「システム開発会社ですよ。佐藤さんは、人工知能の分野において、画期的な成果を残しているんです」

「いわゆるAIってやつか？」

「そうです。その中でも、佐藤さんが手がけているのは、人間の思考を模倣する、高度なものです」

「そうなんだ。よく、システム開発会社の社長の顔なんて、覚えていたね」

久保田が高校生の頃は、企業の社長なんて少しも興味がなかった。

「ニュートンに掲載されていましたから」

「ニュートン？」

「科学雑誌ですよ。佐藤さんは、人工知能に自我を植え付けることに成功したんです。ただ、倫理観の問題で各方面から叩かれていましたけど、その技術を応用すると……」

途中から、武英が何を言っているのか分からなくなった。

分かったふりをしながら、相づちを打っているうちに、久保田はバイトの時間を終えた。入れ替わりで入って来た大学生にバトンタッチして、バックヤードに戻った。

ロッカーの中からスマホを取り出し、すぐに有紀子に、佐藤が店に来たことを報せるメッセージを送信した。

彼女に確かめれば、佐藤の来訪が意図的なものか、偶然なのか分かる。

返信はすぐに来た。

△そうなんだ。でも安心して。あの人は、絶対に私たちの関係に気付いていないから▽

△そうかな？▽

△ひーくんは心配性だな。あの人は、そもそも私に無関心だから▽

△有紀子に関心を持たないなんて、本当にクズだな▽

△笑 私には、ひーくんがいればいいから。好きだよ▽

△おれも。早く会いたい▽

△今、急用で遠くにいるから、まだ会えない。でも、すぐに会えるから安心して▽

有紀子とのやり取りで、久保田の中にあつた不安が和らいだ。彼

女の言うように、心配し過ぎなところがあったのかもしれない。

気持ちを切り替え、着替えを済ませて裏口から店舗を出したところ
で、「久保田」と声をかけられた。

顔を向けると、そこには佐藤の姿があった。

気付かないふりをしようかとも思ったが、目が合ってしまった以
上は、どうにもならない。

「佐藤。どうしたんだ？」

「どうした——はないだろ。せつかく再会したんだ。昔話でもしよ
うじゃないか。お前に、報告しなきゃいけないこともあるし」

佐藤が、ぼりぼりと気恥ずかしそうに頬を掻く。

——有紀子との結婚のことだ。

佐藤の言動から、それを察した。つまり、佐藤は久保田と有紀子
との関係に、気付いていないということだ。

だが、だからと言って、のこのことついて行くのは拙い気がする。

「悪い。ちよつと用事が……」

「そう言うなよ。十五年ぶりだぞ。大丈夫。ちよつとだけだから」

佐藤が肩を組んで来た。

——こいつは、こんなに強引な奴だったか？

何とか、断る口実を探したのだが、結局、何も見つからず、「少
しだけなら」と応じてしまった。

久保田は、車の助手席に座っていた――。

車に詳しくない久保田でも知っている高級車だ。

もったいかついのかと思ったが、インパネには巨大なモニターが設置されていて、色とりどりのアンビエントライトが光っている。

おまけに、EV車らしく、エンジン音や震動が全くない。

先進的で、SF映画に出てくる宇宙船のような感じさえある。

久保田が座っている助手席は、リクライニングはもちろん、オットマンまで付いていて、身体を包み込まれているような安心感があった。

こんな状況でなければ、眠っていたかもしれない。

「どうした。キョロキョロして」

ハンドルを握る佐藤が、声をかけてきた。

「あ、いや、凄い車だな――と^{すじ}思ってた」

「これは試作品なんだ」

「試作品？」

「そう。今、自動運転システムの開発をやっているんだよ。人工知能を^{たか}搭載することで、より人間に近い運転ができるように調整をし

ているんだ」

「何だか恐いな」

「そうでもない。今だって、ぼくはハンドルに手を添えているだけで、後は車が勝手に運転してくれている」

「凄いな」

「技術的には、もう完成している。後は法整備の問題だ」

「そうなんだ」

曖昧に返事をしながら、チラリと佐藤に目をやった。

ニコニコと笑っていて機嫌は良さそうだ。この感じからして、やはり久保田と有紀子の関係は知られていないようだ。

「で、何処に向かっているんだ？」

久保田は、運転している佐藤に訊ねた。

強引に押し切られる形で、車に乗ってしまったが、行き先すら聞いていない。

「近くだから、ウチに来てくれよ」

「家に？」

驚きのあまり、声が裏返ってしまった。

「ああ。そっちの方が、落ち着いて話ができるだろ。何なら、久保田の家でもいいぞ」

久保田の家に来られるくらいなら、まだ佐藤の家に行った方がいい

い。

成功者である佐藤に、六畳一間の部屋を見られるのは、プライドが許さない。

「分かったよ。お前の家でいい」

有紀子は、急用で遠くに出かけているようなので、鉢合わせになることはないだろう。一応、後で家に行ったことは、伝えておいた方がいいかもしれない。

車は、ほとんど振動も感じさせず軽快に走り、高台にある一軒の家の前で停車した。

真っ白い箱形で、壁一面が窓ガラスになっている。ハリウッドのセレブが住みそうな前衛的な建物だった。

何より、久保田の住んでいるアパートが、三棟は入ってしまいうな大きさだ。

「凄い家だな」

「仕事場も兼ねているんだ。色々と機材を持ち込んでいるから、ずっと研究ができる」

「お前らしいな」

佐藤は家の中でも仕事に没頭し、有紀子を蔑ろにしたというわけだ。

そのことに対して、怒りよりむしろ感謝の方が大きかった。その

お陰で、久保田は有紀子と再会できたのだ。

「エリス。ただいま——」

佐藤が、玄関の前で声を上げる。

——エリスって誰だ？

佐藤は、有紀子の留守をいいことに、女を連れ込んでいるのか？等と考えていると、^お帰りなさいませ——vという女性の声と共に、玄関のドアが自動で開いた。

佐藤が玄関に入ると、これまた自動で電気が点灯した。

「凄いハイテクだな」

久保田は、驚きと共に声を上げたが、佐藤の反応は薄かった。

「スマート家電と一緒にだよ。最近は、何処の家にも付いているだろう？」

「アレクサとか、そういうやつか？」

テレビのCMなどで、見たことはあるが、久保田のアパートに、そんな大層なものはない。

玄関は自分で開けるし、電気も自分で点ける。

「まあ、似たようなものだ。ただ、あの手のAIは、弱いAIと呼ばれるもので、特定の分野の中でしか、その機能を発揮することができない。ぼくの作ったエリスは、強いAIと呼ばれるもので、人間の思考を模倣することで、あらゆる分野に適応することができる

んだ」

「へえ」

武英が、そんな話をしていたな。

「家事はもちろん、ぼくの秘書としての仕事を、一手に引き受けてくれている」

「それは凄いな」

家事だけでなく、秘書業務に至るまで、全て機械がやってしまうのだとしたら、それこそ、有紀子がこの家にいる価値は、皆無に等しい。

佐藤に案内され、廊下を進み、広いリビングルームに出た。

一面窓ガラスに覆われたその部屋は、かなりの広さがあるが、物が少ないせいか、どうにも落ち着かなかつた。

佐藤に促されて、向かい合ってソファアに腰掛けることになった。すると、ファミレスで見かけるような、自走式のワゴンが、微かなモーター音と共に近付いた。

久保田様のお飲み物は、ビールでよろしいでしょうか？

ワゴンがそう言った。

突然、機械に名前を呼ばれたことに、驚きを覚える。

「え？ 何でおれの名前を……」

「車の中の会話を聞いていたんだよ」

佐藤がさらりと言った。

「聞いていた？」

「そう。さつきも言ったけど、玄関での対応はもちろん、このワゴンも、車の運転も、全部エリスがやっていたんだよ。人間なんかよ
り、よほど優秀だ」

「反抗とかしないのか？」

久保田が訊ねると、佐藤は声を上げて笑った。

「エリスは、ぼくの秘書だと言っただろ。彼女の最優先事項は、ぼくのサポートをすることだ。ぼくに対して、反抗するなんてあり得ないよ」

「そういうもんか？」

「そういうものだよ。それより、ビールでいいだろ？」

「あ、うん」

本当は酒を呑みたい気分では無かったのだが、半分、押し切られるような形で、久保田は領いてしまった。

すると、ワゴンの全面にあるパネルが開いた。

中にはビールを始めとした、様々な飲み物や、グラスなどが収納されていた。

てつきり、この中から自分で取るのだと思っていたが、ワゴンの背面から、二本のアームが伸びて来て、滑らかな動きでビールを取

り出し、グラスに注ぐと、コースターと共に久保田の前に置いた。
注ぐとき、グラスの角度を動かし、泡の量まで調整したのだから、
驚かされる。

「さあ、再会を祝して乾杯しゅくといこうじゃないか」

佐藤が、自分の分のグラスを掲かかげた。

「ああ……そうだな」

有紀子のうりのことが脳裏のうりを過より、後ろめたさを感じたが、取り敢えず
グラスを合わせて乾杯すると、ビールを口に含んだ。

5

こんな風に、酒を呑んでしまったが、頃合いを見て、早々に退散
したい。

「しかし、久保田は凄いな。まだ、諦めずに役者をやっているんだ
よな」

「まあ、情性だせいだけどね」

「そんなことない。あの頃から、久保田は他と違っていたからね」

「そんなこと……」

「学生時代から、役作りに対する執念しゆんみたいなものを感じたよ」

「いや……」

正面切って褒められると、悪い気はしないが、居心地の悪さはあった。

役者をやっているといっても、久保田の生活のメインはコンビニのバイトなのだ。

「謙遜するなよ。今だって、役作りのために、わざわざコンビニでバイトしているんだろ。なかなかそこまではできないよ」

——え？

久保田は、危うく声に出しそうになった。

佐藤には役作りのために、コンビニでバイトをしているとは言っていない。それを伝えたのは、有紀子に対してだ。

佐藤は、久保田と有紀子とのメッセージのやり取りを盗み見ていたのかもしれない。そう考えれば辻褄が合う。

ということは、佐藤は、二人の関係を知っている。その上で、教えてコンビニに姿を現したのだ。有紀子が、出かけている日を狙って——。

真実を確かめたいという衝動に駆られたが、久保田はぐっとその気持ちを抑え込んだ。

——落ち着け。

焦って余計なことを言えば、墓穴を掘ることになる。

こういう時こそ、これまで培ってきた演技力を発揮するべきだ。

「こだわるタイプなんだよ。そのせいで、あまり多くの仕事をこなせないのが、欠点だけどね」

久保田は、素知らぬ顔で話を合わせる。

「いや、凄いと思うよ。で、その役作りの成果は、何処で見ることが出来るんだ？」

——嫌な質問だ。

「悪いけど、まだ情報は出せないんだ。この業界は、解禁のタイミングを間違えると、大変なことになるからね」

「そうか。それは仕方ないね。でも、情報が出せるようになったら、ぼくに教えてくれよ。何があっても駆けつけるから」

「ああ。そうする」

そう応じた後、久保田はそれとなく腕時計に目を向けた。

「悪い。もう行かないと——」

久保田は、そう言いながら立ち上がる。

「もう少しいいだろ？」

「ごめん。明日、撮影で朝が早いんだよ。また、今度ゆっくり」

久保田は、そう言って立ち去ろうとした。

「そうだよ。明日、久保田はオーディションがあるんだよね」
思わず動きが止まった。

——なぜ、それを知っている？

やはり、佐藤は、久保田と有紀子のメッセージのやり取りを見ているのではないか。

どう返答するのが正解なのか、幾ら考えても答えが見つからなかった。ただ、額から冷たい汗が流れ落ちる。

「そうだった。まだ、君に言っていなかったことがあるんだ——」

長い沈黙のあと、佐藤は唐突とつとつに口を開いた。

「話していないこと？」

「ああ。実は、ぼくは有紀子と結婚したんだ」

今、この話を持ち出すということは、やはり、佐藤は久保田と有紀子の関係を知っている。

真摯しんしに謝罪をして、許しを乞こうべきか？ 或あるいは、シラを切り通すべきか？ 散々迷ったが、結論が出ず「そうだったんだ」と、か

細い声で答えるのがやっとだった。

「今だから白状するけれど、君たちが交際している時から、色々と相談を受けるようになっていたんだ」

——それは知らなかった。

だが、責めるようなものでもない。よくあることだ。現に、今はその関係が逆転しているのではないか。

「おめでどう——」

久保田は、無理に笑顔を作りながら言った。

それを受けた佐藤は、苦笑いを浮かべながら、首を左右に振った。

「正直、有紀子と結婚したことは、後悔しているよ」

「後悔だつて？」

「君も、交際していたんだから知っているだろ。有紀子はね、一人の男で満足できるタイプじゃないんだよ」

「何の話だ？」

「彼女は、学生時代から、複数の男と交際をしていたじゃないか。

もちろん、久保田と付き合っている時も。サークル内では、秋本とか長岡ながおかとかとも交際していたな。そうした彼女の悪癖あくへきも、結婚したら直るかと思っていたけど、ダメだった」

佐藤が、昔を懐かしむように目を細めた。

「何を言っているんだ。彼女は、そんな女性じゃない」

「信じていたんだね。彼女のことを。今も、信じているんだろうな。だけど、それは、幻想に過ぎないんだよ」

「幻想って何だよ！ お前は、有紀子のことを何も分かっていないー！」

感情を抑制よくせいさせなければいけない。それは分かっていたはずなのに、有紀子をふしだらな女だと言わんばかりの佐藤の言いように、我慢ができなくなった。

「何も分かっているのは、久保田の方だよ」

佐藤が無表情に言う。

「何だって？」

「まあ、当然だよな。久保田は、何時だって自分のことしか見ていない」

「お前……」

「有紀子が、久保田の思う通りの女なら、結婚しているのに、他の男とホテルに行ったりしないだろ」

——やっぱりだ。

佐藤は、久保田と有紀子の関係を知っている。

嫉妬から、こんな話をしているのだ。見苦しいにも程がある。何れにしても、バレているのなら、これ以上、取り繕つくろう必要はない。

「全部、お前のせいだろ。仕事にばかりうつつを抜かして、彼女のことを蔑ろにするから、こういうことになるんだ」

「とんだ開き直りだな」

「そう思ってくれても構わない。だけど、お前が、有紀子を追い詰めたのは事実だ」

「ぼくが、彼女を追い詰めた……か。彼女が、そう言ったのか？」

「そうだ」

「で、それを信じた」

「当たり前だ」

久保田が言うと、佐藤は、なぜかくつ、くつ、くつ、と押し殺したような笑い声を上げ始めた。

その態度が、久保田の神経を逆撫さかなでする。

「何がおかしい？」

「ごめん。だけど、久保田は学生時代と何も変わっていない——と思っただら、おかしくて」

「バカにしてるのか？」

「違うよ。褒めているんだ。久保田は、何時までも純粋なままだ。だけど、現実を見た方がいい」

「現実だって？」

「そう。有紀子が、久保田と不倫していたことは知っている。けど、相手は、久保田だけじゃないんだ」

「おれだけじゃない？」

「ああ。マッチングアプリで知り合った男や、うちの会社の若い社員とも、交際をしていたんだ。手口は全部一緒。新宿の高級ホテルのラウンジで会って、ぼくとの関係が冷え切っていることをアピールする。その上で、相手を褒めちぎる。で、頃合いを見て、ホテルに部屋を取っていることを告げる。久保田もそうだったんだろ？ 有紀子は、そういう女なんだよ」

「何をバカな……」

否定の言葉が続かなかった。

久保田と有紀子の関係は、佐藤が指摘した通りの内容だったからだ。いや、そんなはずはない。偶々、佐藤の推測と一致してしまっただけだ。

「まだ、信じられないようだね。なら、証拠を見せてあげるよ」

佐藤が冷たい笑みを浮かべると、ついて来いと手招きしながら、歩き始めた。

このまま、回れ右をして立ち去ろうと考えたが、何だか、それは佐藤に負けることのような気がした。

有紀子を愚弄ぐろうされたままでは終われない——久保田は、その思いに突き動かされて、佐藤の背中を追いかけた。

佐藤は、広いリビングルームを出ると、廊下を進んだ先にあるドアの前に立った。

「この先に証拠がある。自分で、入って確かめればいい」

佐藤に促され、久保田は意を決してドアを開けた。

中の光景を見て、思わず息が止まった。

部屋は寝室らしく、キングサイズのベッドが置かれていた。

そして——。

そのベッドの上には、血塗れちまみの男女の死体が横たわっていた。

男性の方は、まったく知らない人物だったが、女性の方は見覚えがあった――。

有紀子だ。

あれほど美しかったはずの有紀子が、血塗れの死体になっていると認識すると同時に、嘔吐感おうとがこみ上げてきた。

喉を詰まらせながらも、酸すっぱい唾を飲み込み、何とか堪こえた。

「こ、これは、いったいどういうことだ？ ゆ、有紀子が、死んでいるじゃないか……」

久保田は震える声で告げたが、当の佐藤は、平然と戸口のところに立っている。

微かに笑みを浮かべる余裕すらある。

「どうと言われても、凄く簡単な話だよ。有紀子の恋人の一人が、ストーカー化したんだ。結婚しようという彼女の言葉を信じて、駆け落ちをしようとしたのさ」

「……………」

「だけどね、有紀子は打算的な女だ。火遊びをしたとしても、今の悠々自適な暮らしを捨てる気はなかった。結果として、暴走した男が、有紀子を刺し殺してしまったんだ」

おどけた調子で喋る佐藤の神経が理解できない。

「……………」

「ぼくは、エリスから家で起きていることについて、連絡を受けて、慌てて帰宅した。で、その男と揉み合いになって、うっかり刺してしまったんだ」

有紀子を殺したのは、名前すら知らない男で、その男を殺したのが佐藤——ということか。

その状況は分かったが、感情が追いついていかなかった。

有紀子に、自分以外の恋人がいたというショックもある。自分だけ弱みを見せてくれていると思っていたが、それは久保田の思い込みに過ぎなかった。

それだけじゃない。再び、愛したはずの有紀子は、今、物言わぬ死体になっているのだ。

「……………」

「実は、今日、久保田を待っていたのは、この死体を片付ける手伝いをしてもらおうと思つてのことだ」

佐藤が、至極軽い調子で言った。

「は？ 何を言っているんだ？ すぐに警察に……」

「それは止めた方がいい」

「なぜ？」

訊ねてから、バカな質問をしたと思う。

有紀子を殺したのは違うかもしれないが、男の方を殺したのは、佐藤自身なのだ。警察に通報すれば、すぐに逮捕されることになる。

だが、佐藤の口から発せられたのは、久保田の想定外のものだった。

「警察に通報すれば、久保田が逮捕されることになる」

「おれが？ そんなはずは……」

「あるんだよ」

佐藤がにっと笑った。

「な、何を……」

「そもそも、どうしてぼくが、久保田たちの関係を知っていたと思うんだい？」

「それは……」

久保田が答える前に、佐藤がスマートフォンを取り出した。

見覚えのあるカバーがしてある。あれは、有紀子が持っていたものだ。

「有紀子は、パスワードをかけて安心していたみたいだけど、そんなことをしても意味がないんだ。エリスは、様々なデータにアクセスできる。もちろん、このスマホにもね。だから、最初から全部知っていたんだ」

佐藤は、スマートフォン画面に、久保田とのメッセージのやり取りを表示させた。

気付かないうちに、ずっと佐藤にメッセージのやり取りを閲覧えっらんされていたということか。ぞっとすると同時に、なぜ、久保田が有紀子にしか伝えていない事実を知っていたのか、得心もした。

「卑劣ひれつな……」

思わず声が漏れる。

「卑劣？ 他人の妻を寝取るのと、どっちが卑劣なんだい？」

「……………」

それを言われると、返す言葉がない。

「エリスは何も、メッセージを閲覧するだけじゃない。本人に成りすまして、メッセージを送ることだってできる」

「もしかして、有紀子が遠くに出かけているというのは……」

「その通り。あれは、エリスが久保田を呼び寄せるために、送ったメッセージだ」

「……………」

「ぼくも、殺人犯にはなりたくない。だから、エリスにアリバイを作ってもらった」

「アリバイ？」

「そう。ぼくの車の位置情報を操作してあるんだ。今頃、名古屋辺

りを走っていることになっている。ちなみに、幾つかの防犯カメラにもアクセスして、情報の書き換えをやってもらっている」

「そんなこととしても、警察は気付くはずだ」

久保田が主張すると、佐藤は再び笑った。

「気付くわけではないよ。日本の警察は、サイバー犯罪に対して後手に回っている。専門家もない。エリスの改竄かいざんの痕跡こんせきに気付く者は皆無だよ」

「……………」

「とにかく、ぼくの不在を証明した上で、有紀子と久保田のメッセージのやり取りを改竄するんだ。例えば、こんな風に——」

佐藤が言うのと同時に、スマートフォンのメッセージ内容が、次々と変わっていく。

△君は、ぼく以外にも恋人がいたんだね。許せない。二人を殺して、ぼくも死ぬ——▽

表示されたメッセージを見て、身体の芯から震え上がった。

こんな内容のものを警察に見られたら、間違いなく嫌疑けんぎは久保田に向いてしまう。

△丁寧ていねいに、メッセージに記された日付や時刻も、書き換えられて

いる。

「もちろんこれだけじゃない。うちの防犯カメラの時刻もズラして、
犯行可能時刻にきたことにさせてもらう」

——そうだ！ 防犯カメラだ！

「そんなことをしても意味はない。防犯カメラには、佐藤も一緒に
映っている」

「ぼくの姿はCGで消すよ。映画を観れば分かる通り、最近の映像
技術は、目を^{みは}睦るものがあるからね。よほどのことがない限り、手
を加えられていることに、警察は気付かない」

絶望の波が押し寄せてきた。

佐藤の言う通り、このままだと、久保田が犯人に仕立て上げられ
てしまう。せつかく、オーディションで手応えを感じ、これからだ
と思っていたというのに……。

——あれ？

いつの間にか、有紀子の死を悲しむ感情が消し飛び、自分のこれ
からのことばかり考えていた。

佐藤の言う通り、久保田は自分のことしか見ていないのだろう。
有紀子のことにしてもそうだ。彼女を本当に愛したのではなく、

輝いていた過去の自分を重ねていたに過ぎない。

だから、必死にこの状況から逃れようとしている。

「ど、どうしたらいい？」

久保田が懇願こんがんすると、佐藤はにっこ笑みを浮かべてみせた。

7

久保田は、車の運転席のシートに座り、深いため息を吐いた――。

あの後、佐藤と一緒に、二人の死体をトランクに詰め込む作業を行った。死んで動かなくなった人間というのは、想像していたのよりはるかに重く、かなりの重労働になった。

ただ、それで全てが終わったわけではない。

これから、この死体の処分に行かなければならないのだ。

「さつきも説明したけど、運転は全てエリスがやってくれる。久保

田は、ただ乗っているだけでいい」

「本当に大丈夫なのか？ おれ、免許持ってない。もし、警察に見つかったら……」

「大丈夫だよ。エリスが、警察を回避したルートを走行してくれる」

「警察の巡回情報をハッキングしたのか？」

「そうじゃない。巡回ルートは、ランダムなようで、実は一定のアルゴリズムがあるんだ。それを解析しただけだよ」

「そういうことか」

分かったふりをして頷いたが、本当は理解していない。きっと佐藤は、そんなこともお見通しなのだろう。

「目的地は、うちが保有している工場だ。そこには、鉄くずなんかを粉碎する機械があるんだ。その中に、死体を入れてしまえば、自動的に細かく肉片にしてくれる」

佐藤は、さらっと恐ろしいことを言う。

だが、その方法が合理的であることは間違いない。細かく粉碎することができれば、死体が発見されるリスクは、格段に低くなる。ただ――。

「おれに、その作業ができるかどうか……」

「久保田は、車を倉庫に入れてくれるだけでいい。死体の処分は、日を改めてやることにする。もちろん、手伝ってもらおうけどね」

考えないようにしていたが、今さらのように、人間の身体が粉々に粉碎される様が脳裏に浮かび、酸っぱいものがこみ上げてくる。

「ぼくは寝室の証拠を隠滅しなきゃいけない。後は頼んだよ」

佐藤が、そう言うのと同時に、アクセルも踏んでいないのに車が走り出した。

このままナビゲーションの通りに、目的地まで自動で走っていく。久保田などいなくてもいいのだが、それでも、こうして運転席に座っているのは、無人の車が走り回っているのを目撃されると、騒ぎ

になるからという佐藤の言い分があったからだ。

佐藤によると、現在の技術で、自動車の自動運転は可能らしい。

だが、法整備が追いついていないというのが現状だ。

現に、今、久保田が乗っている車も、何も操作していないのに、自動で走っている。

障害物を避けるだけでなく、信号や標識を読み取り、必要に応じて、停車をして、レーダーで安全確認を行う。

最初は、怖さがあったが、エリスの滑らかな運転は、人間のそれより安全だとすら感じる。

何れにしても、一般の人は、無人の車が走っていたりすれば、それだけで驚いてしまう。下手をしたら、心霊現象として取り沙汰されることになる。

死体を運搬するのだから、そうした目立った動きを避けるために、ハリボテの運転手として、久保田が乗っているのだ。

△どうだ。順調か？▽

二十分ほど走り、市街地から山道に差し掛かったところで、急に車内に佐藤の声が降ってきた。

一瞬、慌てたものの、この車はネットに接続されていると佐藤が言っていた。それを通じて、話しかけているのだらう。

「ああ。今のところ、特に問題はない」

△それは良かった。こちらも、何とか寝室の処理ができそうだ。また、連絡するよV

通信が途切れた。

ため息を吐いたところで、不意に赤い光りが目に入った。

ハンドルに手をかけ、視線を前に向けると、幾つもの赤色灯が明滅しているのが見えた。

——あれはパトカーだ。

検問をやっているらしく、三角コーンで道路を塞いでいる状態だ。

「拙ますい」

久保田は、慌ててブレーキを踏んだが、車が停止することはなかった。

ハンドルを回しても、方向が変わらない。

「おい！ 佐藤！ 聞いているんだろ！ 警察の検問だ！ すぐに引き返そう！」

半ばパニックになりながらも、久保田は叫んだ。

△警察は、既に車両を認識しています。现阶段で引き返せば、追跡される恐れがありますV

佐藤ではなく、機械で合成された女性の声が返ってきた。

おそらく、エリスが喋っているのだろう。

「だけど、おれは免許を持ってないんだ」

△承知しております。こちらで、警察のデータを操作し、久保田様が免許を取得していたことにします。不携帯による違反切符を受けることとなりますが、それが現状で、もつともダメージが少なくなります▼

反論は色々あるが、警察は、もう目前まで迫っている。ここま
で来たら、信じるしかない。

車は警察の振る赤色灯に応じて停車した。

制服の警察官が、運転席の脇に立ち、窓を開けるように促した。

ウィンドウを開けるスイッチは何処だ？ 久保田が探しているうちに、ひとりでにウィンドウが開いた。

「こんばんは——」

警察官が、にこやかに声をかけてくる。

「どうかしましたか？」

久保田は、演技力をフル動員して、にこやかに応じる。

「実は、車の盗難情報が入っていました」

「盗難ですか」

「はい。白のSUVです」

警察官のその言葉に、心臓が跳ねる。

まさに、この車が白のSUVだ。いや、あせ焦るな。白のSUVなんて、街中はぐで腐るほど見かける。

あくまで、冷静に対応していれば問題ない。

「これも、白のSUVですけど、盗んだものじゃありませんよ」

久保田が応じると、制服警官の表情が歪ゆがんだ。

「あなた、お酒飲んでますね」

——しまった。

佐藤の家で、ビールを一杯飲んだ。自分で運転してはいないが、この状況では、飲酒運転を疑われるのは当然だ。

「あ、いや、飲み会の席にはいましたけど、ぼく自身は飲んでいません」

「そうですか？ では、検査だけさせてもらってよろしいですか？」

「検査？」

——落ち着け。

自分に言い聞かせる。飲んだのは一杯だけだ。アルコール検知の検査に、引っかからないということも、充分にあり得る。

下手に抵抗して、車のトランクを開けられた方がヤバイ。

「分かりました」

「では、車を降りて下さい」

「はい」

久保田は、ドアノブに手をかけたが、いくら動かしても、ドアが開かなかった。

——あれ？

「どうしました？ 降りて下さい」

「いや、その、降りようとしているんですけど、ドアが開かなくて」

「変な言い訳は止めて下さい」

「本当なんです」

焦りのせいで、額から汗が滝のように流れ落ちる。

必死にドアノブをガチャガチャと動かすが、やはりドアが開かない。
い。

「エリス。どうなっているんだ」

呼びかけたが、全く反応しなかった。

そうこうしているうちに、二人の警官が駆け寄って来た。そのうちの一人が、衝撃的なことを口にする。

「この車、盗難届けが出ている車両ですね。今すぐ、車を降りて下

さい」

「え？」

——どうということだ？

佐藤が盗難車に乗っていたということか？ いや、そんなはずはない。だとしたら、佐藤が警察に盗難届けを出した？

「なぜ？」

気付けば、車を五人もの制服警官に囲まれていた。

「今すぐ、開けなさい」

制服警官の口調が、明らかに変わった。

これは拙い。どうにかしなければ——考えているうちに、ガチャつとロックの外れる音がした。

ようやく、ドアが開いたと思ったのだが、そうではなかった。

開いたのは、死体の入っているトランクだった。

制服警官の一人が、懐中電灯の明かりを照らしながら、死体を包んだビニールシートを捲る。

「し、死体だ！」

制服警官が、叫び声を上げた。

——終わった。

そもそもが無謀な計画だったのだ。久保田は、完全に諦めて脱力した。

が、次の瞬間、車が急発進をした。

制服警官たちは、即座に離れたので、誰かを撥ねるようなことはなかったが、このタイミングで走り出すなんて、最悪の選択だ。

「と、停まれ！」

久保田は、叫びながらブレーキを踏んだが、停まるどころから、さらなる加速を始めた。

踏み間違いではない。

車が——エリスが、逃亡しようとして、意図的に速度を上げたのだ。

「逃げ切れない！ 今すぐ停まるんだ！」

久保田が叫ぶ。

△逃げるのが目的ではありません▽

エリスから、冷淡な返答があった。

「何だって？」

△警察に見つかることは、想定範囲内でした▽

「想定範囲内って……」

△そう慌てるなよ▽

エリスとの会話に、佐藤の声が割り込んできた。

「さ、佐藤！ これは、どういうことなんだ！」

△さつき、エリスが言っただろ。警察に追われることになるのは既定路線だ。そうなるように仕向けたんだ▽

「どうして？ 死体が見つかれば、お前だってただじゃ済まないぞ！」

久保田が訊ねている間にも、車はどんどん加速していく。

カーブの度に、身体が揺さぶられ、まるでジェットコースターのようだ。

△そうでもない。警察には、車が盗難されたことと、妻が行方不明

になっていること。それに、寝室に大量の血痕が残っていることを伝えてあるからね▽

「どうして、そんな……」

△何だ。まだ気付かないのか？ 全部、久保田がやったことになるんだよ▽

「ふざけるな！ 警察に、洗いざらい喋ってやる！」

△できるわけないだろ▽

「できるさー！」

△無理だね。だって、ぼくはね、最初から有紀子の浮気相手は、全員、殺すつもりだったんだよ▽

「殺すって……」

△そうだよ。久保田も含めてね――▽

――そういうことか。

気付いたときには、もう遅かった。

すぐ目の前には、ガードレールが迫っていた。ブレーキもハンドルも意味がない。この車を運転しているのは、人工知能のエリスだ。激しい衝撃がしたかと思うと、車はガードレールを突き破り、そのまま崖下に転落していく。

こうなると、もう為す術は無かった。

久保田は、ただ迫りくる恐怖に身を委ねるしかなかった。

しばらく浮遊したあと、鼓膜を破るほどのけたたましい音とともに、再び激しい衝撃が突き抜けた。

目の前が、真っ暗になる。

節々に、強烈な痛みが走り、久保田は思わず呻き声を上げた。

呼吸をするのも困難なほど肋骨が痛んだ。額から血が流れているようだが、それでも、まだ生きている。

——助かった。

エアバックを始めたとした、車の安全性能のお陰で、何とかまだ生きている。

安堵すると共に、強烈な怒りがこみ上げてくる。

このままでは終わらせない。必ず、佐藤に報いを受けさせなければならぬ。

△まだ、元気そうじゃないか▽

佐藤の声が聞こえてきた。

「てめえ！ 絶対に許さない！ 全部警察に話してやる！」

久保田は、痛みに悶絶しながらも声を上げる。

△だから、それはできないよ▽

「何でも思い通りになると思うなよ」

△残念だけど、ぼくの思い通りになるんだよ。知っていたかい？
リチウムイオン電池というのは、一度発火すると、爆発したりする

んだ。その上、消火するのが難しいんだよ。海外では、七時間も燃え続けたなんて例もあるくらいだ▼

佐藤が、何をしようとしているのかを理解した。

何とかシートベルトを外そうとしたが、金具が外れなかった。事故の衝撃なのか、それとも最初から細工されていたのか――。

考えているうちに、爆発音がして、久保田の目の前が真っ赤な炎に包まれた――。

(終)